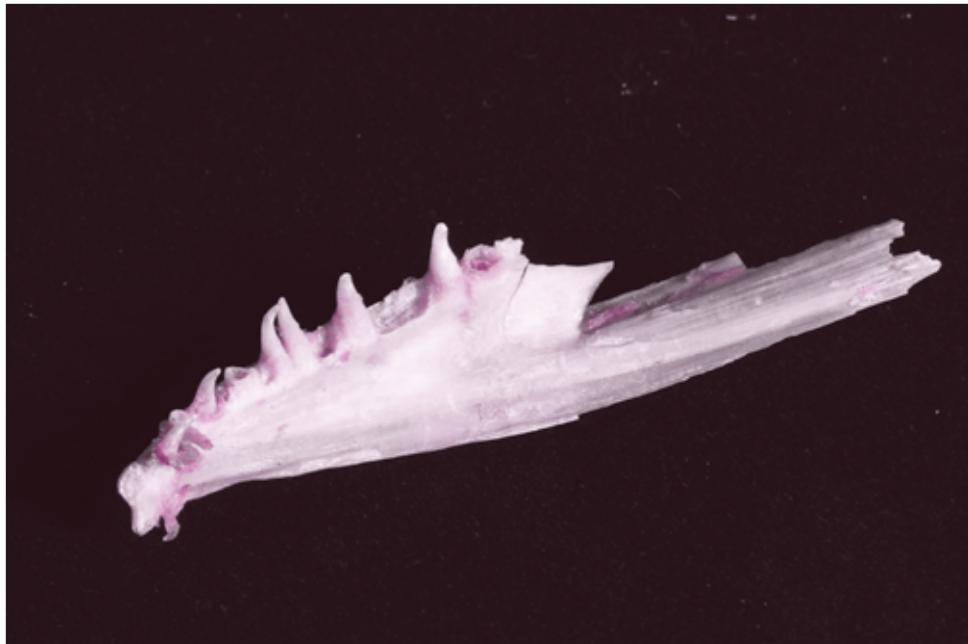




北方民族博物館だより

No.139



E700 まじない具くイトウ（魚）のあごの骨> 北海道アイヌ／網走
6.3×1.7 cm 1924年収集

イトウ (*Parahucho perryi*) は、サケ科イトウ属の淡水魚で、日本では北海道にのみ分布する。国内の淡水魚のなかでは最大となる種であり2 m近くまで成長するという。現在は生息環境の悪化により数を減らし、絶滅危惧種に指定されている。

アイヌの人びとはイトウを一般に「チライ」と呼び、身は食用に、皮は衣類の素材としたほか、網走周辺のアイヌはその下あごの骨を漁の前に行う占いに用いた。占いをする者はまず火の神に祈りを捧げてからあごの骨を頭上に載せ、「魚がとれるなら仰向けに、とれないならうつ伏せになれ」と唱える。そして頭から骨を地面に落とし、骨がうつ伏せの状態だった場合、その日の出漁を取りやめた。

目次 Contents

- 1 表紙 まじない具くイトウ（魚）のあごの骨>
- 2-4 シンポジウム「映像と北方諸民族文化2」
- 5 講習会「白樺樹皮工芸」
／講習会「草木染体験」・講座「草木染の話」
- 6 ロビー展「皮革文化財と科学技術」
／ロビー展「絵と詩 少数民族シヨルのこころ」・
講座「絵と詩 少数民族シヨルのこころを覗いてみよう」
- 7 上映会 北方民族博物館シアター夏
／上映会 北方民族博物館シアター冬
- 8 INFORMATION

第39回北方民族文化シンポジウム網走 映像と北方諸民族文化2

2025.10.11-12(土・日)

映像人類学の分野では、北方民族文化を対象とした数多くの成果が上げられてきました。今回のシンポジウムでは、昨年に続き、民族文化を対象とした映像について検討しました。以下に各発表の概要を報告します。

* * *

【第1部】文化財と写真 (座長:田口洋美氏/狩猟文化研究所)
「博物館資料の写真:トウバとモンゴルにおける博物館、(先住民)研究者、ソースコミュニティ間の知の共同創出」(ビクトリア ピーモット氏/ヘルシンキ大学 [フィンランド]・東北大)

本発表は、民族資料の写真が、資料を収藏する博物館、その民族出身の研究者、そして先住民が暮らす現地のコミュニティの間で共有され、多方向的な知が協働的に創出される過程に焦点を当てた。

オスロ大学文化史博物館では、1914年に収集されたトウバの民族資料118点を収藏している。現在のトウバ共和国(ロシア連邦)とモンゴル国に暮らすトウバの子孫たちにこれらの資料の写真を提示すると、その呼称や製作方法、使用方法に関する彼らの記憶が呼び起こされた。過去の遺物として扱われていたこれらの民族資料は、その写真を通じ、失われつつあるトウバ語の保持や世代間の知識継承などに積極的な役割を果たすことができる。



ビクトリア ピーモット氏

「文化財写真の可能性」城野誠治氏(東京文化財研究所)・
笹倉いる美(北海道立北方民族博物館)

2022年の博物館法改正以降、博物館では資料情報のデジタル化が加速している。ウェブ上の博物館資料の検索が一般化し、文字情報に加えて文化財写真の公開が求められている。しかし、文化財写真の品質や公開基準については十分な共通認識が得られていない。

東京文化財研究所と北海道立北方民族博物館は2022年以降、文化財写真の適正な撮影方法、保存形式、公開活用法

などを共同で検討してきた。本発表では、上記の協働事例を通じ、文化財写真に対する基本的な考え方を提示した。つまり、良質な文化財写真は教育・研究に貢献すること、文化財写真の品質は撮影技術と文化財に対する理解で決まること、特に民族資料の写真は、画質そのものが民族文化に対する敬意と説明責任の表明になるということである。



城野誠治氏(左)／笹倉いる美(右)

【第2部】映像のアーカイブと表現 (座長:吳人恵(北海道立北方民族博物館))

「国立映画アーカイブ所蔵・初期アイヌ関連フィルム—複数バージョンの同定と理解の試み」(大傍正規氏/国立映画アーカイブ)

1895～1930年代に隆盛を誇った無声映画は、再編集版や異なる言語版、染色や調色が施された版など、無数に「オリジナル」のバージョンが生み出されていた。そのため、無声映画の調査には、フィルム現物とそれ以外の資料を総合的に対象とする同定研究が不可欠である。

本発表では、リュミエール社(仏)の技師コンスタン・ジレルが撮影した『蝦夷のアイヌ I-II』(1897年)、白瀬轟の南極探検に同行したアイヌ隊員(権犬係)を映し出す現存最古の長編記録映画『日本南極探検』(1910-12年撮影、1930年製作)など、国立映画アーカイブが所蔵する初期アイヌ関連フィルム群の複数バージョンの同定プロセスと課題を共有した。



大傍正規氏

「TRAJECTORIA — 映像と音による学術表現の実験場」(川瀬慈氏/国立民族学博物館)

本発表では、2020年より国立民族学博物館が刊行してい

る査読付きオンライン学術誌『TRAJECTORIA』のねらいと実践について紹介した。

本誌は、人類学、文化遺産、博物館、アートを対象とし、画、写真、音声、グラフィックなど多様なメディア表現を組み合わせることで、マルチモーダルな人類学的表現による新たな知の創出と、その学術的発信を目指すプラットフォームである。発表者は創設者・編集委員の一人として、本誌に掲載された映像作品や論文を取り上げ、従来のテキスト中心の学術発表の限界を指摘した。また、特に先住民作家による博物館への批評的介入や、人間以外の存在の声を取り込んだ作品を通して、『TRAJECTORIA』がいかに新たな知の共有や協働を可能にしているかを検討した。



川瀬慈氏

【第3部】北東アジアの事例（座長：中田篤/北海道立北方民族博物館）

「ロシア極東における伝統的な狩猟用木造舟づくりの民族学的記録映像の意義：沿海地方クラースヌイ・ヤールの丸木舟とハバロフスク地方コンドンの樹皮舟の事例から」（田口洋美氏/狩猟文化研究所）

本発表は、2002年にロシア連邦沿海地方で撮影した丸木舟の製作過程、2005年に同ハバロフスク地方で撮影した樹皮舟の製作過程の記録映像を事例に、映像人類学的記録撮影のあり方と映像資料の利活用について検討した。これらは、単に舟の形を再現するだけでなく、時間と労力を要するプロセス全体を捉えて映像化したものである。

映像人類学は、単なる映像技術の応用にとどまらず、文化の記録・表現・倫理・主体性といった人類学的な問いと深く結びついている。そこで重要なのは、伝統的な職人技や特定の技術に宿る「言葉では伝えられない身体の感覚や動き」を、映像という視覚・聴覚メディアでいかに捉え、伝えるかという点である。民族誌映像あるいは映像人類学は、「感覚の時代」とも言える現在の状況とどう向き合い、文化継承の価値や意義を説明するのか、自問していかなければならぬ。



田口洋美氏

「民族的ルーツと魂の記憶～満洲民族とアイヌ民族の映像探求について～」（金大偉氏/映像作家）

満洲族をルーツに持つ発表者は、アイデンティティーを求める、伝統的な風習を守ろうとする満洲族の人々に焦点を当てたドキュメンタリー映画『ロスト マンチュリア サマン』、『天空のサマン』を制作した。また、アイヌの伝統的な知恵や精神性に重点を置いたドキュメンタリー映画『大地よ～アイヌとして生きる～』も制作した。これらの作品を通じ、伝統的な文化や信仰、言語が失われつつある北方少数民族の苦闘と希望、精神性を探求してきた。

発表者にとって映像は、単なる記録ではなく、異文化の理解や認識、文化の痕跡、記憶や精神性の継承に繋がるプロセスでもある。さらに靈性や祈り、鎮魂の世界とも連動する。本発表では、こうした視点から、民族文化を映像で表現することについて多角的に探求した。



金大偉氏

【第4部】西シベリアの事例（座長：吳人惠/北海道立北方民族博物館）

「ネネツのトナカイ放牧者に関するビデオカメラによる民族誌的フィールドワーク」（リーボ ニグラス氏/タルトウ大学【エストニア】）

本発表では、西シベリアのトナカイ牧畜民を対象とした長期的なフィールド調査の事例を紹介しながら、多角的な機能を有する映像の役割を検討した。

最初の事例は、ヤマル半島の大規模なトナカイ牧畜に関する調査である。ここでは、ビデオカメラで季節的移動、人とトナカイの親密な関係、ツンドラ生活の感覚的側面を

記録した。二番目はハンティ・マンシ地域の事例で、文化的価値や政治的関心を発信するため、トナカイ牧民かつ詩人・活動家のユーリ・ヴェッラが積極的に撮影に取り組む姿勢が描き出された。

二つの事例において、映像は調査の装置として、また異文化間のコミュニケーション手段や互恵性を保障する返礼品として、複合的なレベルで機能していた。究極的には、映像は民族誌的知識を表現するだけでなく、調査者と発信者の出会いを仲介し、社会的経験、感覚的知識、文化人類学的理解が集中する共有空間を創出するのである。



リーボ ニグラス氏

「儀礼撮影を通した現地コミュニティと研究者の協働研究実践の可能性：西シベリア・ハンティの熊遊びの事例」（大石侑香氏/神戸大学大学院国際文化研究科）

近年、北極域の先住民研究や環境研究では、現地コミュニティとの成果の共有だけなく、現地コミュニティのための課題解決や研究者との協働調査・協働評価などが求められている。本報告では、儀礼調査と撮影における研究者と現地の人々との協働研究実践の可能性について議論した。

報告では、まず2000年前後に星野紘らが行ったロシア連邦ハンティ・マンシ自治管区の熊遊び調査、発表者が2016年に訪問した同ヤマル・ネネツ自治管区の熊遊びの事例を紹介した。ハンティの熊遊びはソ連時代に禁止されたが、その後復興し、現在はジェンダーにかかわる禁忌を緩和し、外部者や撮影者を排除せずに観光への展開も期待されるほど開かれたものになっている。これらの事例から、映像・画像の資料的価値の協働評価、資料の取り扱い、儀礼実践者と研究者の知の統合のあり方を検討した。



大石侑香氏

大石氏の発表後、今回のシンポジウム全体に関する総合討論をおこない、各発表者から意見やコメントをいただきました。

共通の話題となったのが、ものづくりなどの技術を記録する媒体として、映像が重要であるということです。こうした技術の継承がさまざまな分野で困難に直面していること、また日本では技術やそれを担う職人に対する評価が一般的に低く、状況を改善していく必要があることが指摘されました。そしてこれらの課題に対し、映像による記録が大きな役割を果たしうるという意見が示されました。

また、映像に対する評価は、後年変化する可能性があるという指摘がありました。そのため、映像記録に関しては、何を撮影するのかということと同時に、記録を長く保存していくことも重要であるという意見が示されました。

最後に川瀬氏により、シンポジウム全体を通じた総括的なコメントをいただきました。各発表により、文化人類学的な研究の記録・データとしての役割、研究者と現地住民による協働作業の手段、そして政治的主張の媒体など、映像のさまざまな在り方が提示されたこと、また現代の映像人類学が直面する多くの課題が明らかになったことが指摘されました。そして今後、映像人類学をテーマとしたシンポジウムを再度開催することを提案していただきました。

* * *

シンポジウム会場には、延べ27名の一般参加者にお越しいただきました。また、オンラインでの参加者は延べ54名でした。限られた時間でしたが、各発表に対して一般参加者からもさまざまな質問やコメントが寄せられました。

なお、シンポジウム関連事業として、9月25日（木）午後6時半より、オホーツク・文化交流センターで『北の果ての小さな村で』（監督・撮影・脚本：サミュエル・コラルデ、2018年、フランス）の上映会をおこないました。上映会には網走市や近隣市町村にお住まいの方を中心に237名の入場者があり、グリーンランドの雄大で美しい風景と心温まるストーリーを楽しんでいただきました。



エコーセンター 2000で行われた関連事業の様子

（学芸グループ 中田篤）

講習会

白樺樹皮工芸

2025.9.6(土) 9:30-12:30

講師：山辺朋子氏（白樺細工工芸家）

ロシアで白樺樹皮工芸を学ばれた山辺朋子氏を講師にお迎えし、今年も講習会を開催しました。今回の作品は、昨年に続いて「はさみケース」です。編む段数を変えることで大小どちらのはさみにも対応できます。

まず、大きな白樺の樹皮から幅1cmの帯を切り出します。白樺の樹皮は何層にも重なっているため、編みやすい厚さに割く必要がありますが、これは講師があらかじめ調整したものを使用しました。はさみケースは仕上がりが二重になるため、やや薄めの樹皮のほうが扱いやすいようです。

続いて、帯状の樹皮に油をなじませる「油なめし」から作業が始まりました。ロシアではひまわり油などを使うことが多いそうですが、どの油でもよいとのことで、講習会では椿油を用いました。帯の先端は編みやすいように細く切ってあります。

次に、白樺樹皮を縦横2本ずつ、十字になるよう交差させ、型紙に合わせて編んでいきます。この交差部分がはさみケースの先端になります。基本的には型紙の順に沿って編むだけですが、途中で一度全体を裏返す工程があり、混乱しやすいとのことで、型紙には「表」「裏」の印を付けていただきました。

好みの段数まで編んだら折り返して先端まで戻っていきます。帯が短くなってきたら予備の帯をつないで作業を続けます。形が見えてくる頃には、参加者の表情にも完成への期待感がみられました。

講師の丁寧な指導のおかげで、参加者全員が時間内に作品を仕上げることができました。厚み調整で出た持ち帰り用の白樺樹皮で、家でもまた作っていただけたこと思います。

(学芸グループ 篠倉いる美)



参加者を指導する山辺氏

講習会・講座

講習会「草木染体験」

2025.9.11(木) 13:30-16:30

講座「草木染の話」

2025.9.12(金) 10:00-11:30

講師：山崎和樹氏（草木工房主宰、染色家）

一昨年に引き続き、草木工房主宰で染色家の山崎和樹氏をお招きして、二日間にわたり草木染の体験と講座を開催しました。両日とも定員を越える応募があり、道内各地から多くの方々にご参加いただきました。

11日の草木染体験では、三班に分かれてそれぞれイチイの樹皮、セイヨウアカネの根、キハダの樹皮で絹布と綿布を染めました。染料となる植物ごとに量や煮出す時間、媒染の有無などの染色工程が異なり、また今回染めの対象となった絹と綿でも仕上がりに大きな違いがみられました（絹の方が色濃く鮮やかに染まります）。山崎氏によれば、染色に使う容器の素材（例えば、鉄・銅・アルミ・錫・ステンレス・陶器など）や水質が最終的な色の仕上がりに影響してしまうこともあるそうです。このように、染色を突き詰めて考えると化学的な反応のプロセスとして捉えることができるという話でしたが、自然由来の染料を用いる草木染にはまだまだわかっていないことが多いそうです。染め上がった三色の絹布・綿布は、参加者全員のお土産になりました。

翌12日の講座は、『延喜式』（10世紀成立）などの文献から古代日本の草木染を解説するところから始まりました。昨年同様、山崎氏の手で色とりどりに染められた絹布の見本が講堂の前に置かれ、参加した方々は興味深そうに見入っていました。

山崎氏には、当館に多数所蔵されているトナカイ等の毛皮衣服の染色技法の調査にも協力いただいております。こちらについては未だ試行錯誤が続いているますが、今後の進展がとても楽しみです。

(学芸グループ 佐藤重吾)



草木染体験の一コマ

ロビー展

皮革文化財と科学技術

2025.11.1（土）～12.14（日）

北方地域では、それぞれの地域に生息する動物の毛皮や革を用いた衣服や道具、楽器、アクセサリーなどが使われています。衣服などに使用される動物は、トナカイやヘラジカ、アザラシ類、クジラ類、クマ類、ウマ、キツネ類、ウサギ類、ビーバー、魚類など様々です。これらに使われている動物の種を知ることは、資料をより良い形で保存、修復するために大切ですが、特に古い資料や寄贈された資料などは、動物種が不明なことも少なくありません。比較的新しくて状態の良い毛皮は、その模様や製作・収集された場所などから動物種を推定することができますが、毛が抜け落ちた毛皮や、なめしの過程で毛が取り除かれた革、製作地などの情報が不十分な場合は、種の推定が難しいこともあります。

本展示では、東京藝術大学大学美術館の飯岡稚佳子学芸研究員らの協力を得て、デジタル顕微鏡写真とAI（人工知能）による非破壊での皮革文化財の動物種判別方法や、なめし剤の同定方法についてパネルで紹介しました。AIは画像から皮の特徴を認識し、複雑なパターンに分類する能力に優れています。AI技術を用いることで、従来目視による調査では難しかった動物種の判別や、劣化の状態把握などが可能になります。

ロビー展の会場には、研究で実際に使用された江戸時代の牛革製台帳など、各種皮革資料が展示されました。動物の種や地域により、その利用方法は様々です。トナカイやビーバー、アザラシで作られた手袋、ホッキョクグマの毛皮を音消しのため脚に着けた椅子、魚の皮製の衣服、トナカイ革の太鼓、アザラシ革のピアスなど、ロシア、中国、モンゴル、カナダ、アラスカ、グリーンランド、北海道の各地で使用された多様な皮革資料が一堂に会しました。

（学芸グループ　日下稜）



ロビー展の様子

ロビー展・講座

ロビー展「絵と詩 少数民族ショルのこころ」

2025.11.1（土）～12.14（日）

講座「絵と詩 少数民族ショルのこころを覗いてみよう」

2025.11.1（土）10:00-11:30

講師：アワマタリエワ ジャクシルク氏

共催：東京大学附属図書館アジア研究図書館

上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）

ロビー展「絵と詩 少数民族ショルのこころ」を開催し、関連企画として、講座「絵と詩 少数民族ショルのこころを覗いてみよう」を実施しました。講師のアワマタリエワ ジャクシルク氏は本展の企画者で、所属するU-PARL（東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門）が掲げる「人のこころのゆたかさ」を探る活動の一環として、中央ユーラシアのロシア連邦ケメロヴォ州に暮らすショルの芸術を紹介する展覧会を東京大学総合図書館で開催し、当館へと巡回させました。

絵と詩の作者であるアルバチャコワ リュボフ氏は、ロシア科学アカデミーシベリア支部言語学研究所の主任研究員でもあり、民族文化に根差した独自の視点、自然観、生活観が作品に表現されています。

講座ではまず、ショルの歴史や暮らし、民族名称に関する背景が取り上げられました。かつては狩猟・農耕・鍛冶を営んでいましたが、18世紀末以降は社会状況の変化により鉄鉱石の採掘や製錬に携わるようになったこと、またロシア正教が浸透したのちもシャマニズムの儀礼が続いてきたことが説明されました。言語については、ショル語がテュルク語族に属し、人口約1万5千人のうち話者が現在1,000人ほどに減少している現状が紹介されました。アワマタリエワ氏は、現代の経済・文化の集中化が少数民族の言語や文化を脅かしていると述べています。

展示会場では、アルバチャコワ氏が個別に制作した絵と詩を、アワマタリエワ氏が構成し直したパネルを用いて、一点ずつ丁寧な解説が行われました。さらに、アルバチャコワ氏から参加者に向けた特別なビデオメッセージも上映され、解説後には活発な質問が寄せられるなど、参加者は強い関心をもっておられました。

（学芸グループ　笹倉いる美）



作品を解説するアワマタリエワ氏

上映会

北方民族博物館シアター夏

2025.8.31(日) 10:00-11:30

講師：佐藤重吾（当館学芸員）

当館所蔵の映像資料を上映する北方民族博物館シアターのシリーズとして、この夏は中国社会科学院民族研究所制作の『鄂伦春族』（楊光海監督、1963年、72分、モノクロ、中国語）を取り上げました。本作は、当館のコレクションの中でも比較的古い作品ですが、撮影された時期が文化大革命（1966年～1977年）の直前期にあたるため、中国東北部、大・小興安嶺地域に暮らす当時のオロチョン（鄂伦春）の人びとの「伝統的」な暮らしの一端を動画で見ることができます。

当日は、映像の上映前に佐藤が15分ほどのレクチャーを行いました。そこではまず、オロチョンの言語、人口、民族分布、生業形態などの基本情報を紹介したのち、主に1930～40年代の文献資料からオロチョンの人びとの衣・食・住と世界観について概説しました。レクチャーの最後には、オロチョンの人びとの近現代史について触れ、とくに1932年～1945年のあいだ、オロチョンが住んでいた地域は（旧）満洲国的一部であったことから、日本とも決して無関係ではないことを説明しました。

映像本編は、オロチョンの男たちが雪原を馬で疾駆するシーンから始まりました。冬の暮らしと夏の暮らしを交互に紹介されるなか、ひと際見る者の目を引いたのは「ハンダハン」（ヘラジカ）をはじめとする各種のシカや、リス、クマなどの動物を狩猟するシーンでした。特徴的なX字の銃架を使って動物を狙撃する映像は、文献で読むのとは全く違った迫力と説得力をもっていました。そのほか、本作の随所にオロチョンの生業や世界観、歌や踊り、道具や交易、ジェンダーについて考えさせられるようなシーンがみられ、改めて本作の映像資料としての価値の高さを実感しました。参加した方々にも満足していただけたようです。

（学芸グループ 佐藤重吾）



上映前のレクチャー

上映会

北方民族博物館シアター冬

2025.11.22(土) 10:00-11:30

講師：日下稜（当館学芸員）

今回の上映会ではグリーンランドとカナダの比較的古い映像の中から下記の4本を上映しました。

- ・「極地エスキモー あやとり」1975年、グリーンランド
- ・「極地エスキモー 氷上での漁撈」1975年、グリーンランド（IWF国立科学映画研究所・ドイツ制作）
- ・「カナダ極北探検」1914/1918年、カナダ（カナダ文明博物館所蔵）
- ・「イグルーのつくり方」1950年、カナダ（NFBCカナダ国立映画制作府制作）

いずれも10分以下の短い映像ですが、当時の現地での暮らしの様子がよくわかるものです。「あやとり」で表現される物は、イグルー（雪の家）や石ランプ、氷から顔を出すアザラシなどエスキモーに特徴的なものが多く見られます。「氷上での漁撈」では、氷の上に寝そべってゆったりとホッキョクイワナを釣り上げる映像が流れます。「カナダ極北探検」は積み重なって人間の背丈の倍以上の高さになった氷の山を犬ぞりを押しながら超えてゆく様子が映し出されています。「イグルーのつくり方」には、直径3mほどのイグルーをわずか2人のエスキモーが1時間半程で作り上げる様子が収められています。「イグルーのつくり方」は英語、その他の映像には音声が無いため、上映中に適宜解説を行いました。また、上映の前後でスライドを用いて当時の暮らしの様子や時代背景、イグルーの構造や強度についての説明を行いました。映像が撮影された時代には幅があるものの、比較的伝統的な文化が残されていた時期であり、犬ぞりや凍った海の上の伝統的な漁撈、イグルーでの生活など、北方地域やエスキモーに特徴的な暮らしの様子を紹介することができました。今後も「北方民族博物館シアター」では、寒い地方ならではの生活の工夫をお伝えしたいと思います。

（学芸グループ 日下稜）



上映会の様子

企画展「開館35周年記念収蔵資料展」

当館は平成3（1991）年2月10日に開館し、このたび35周年を迎えます。開館前から民族・考古資料の収集を行い、また開館後も大勢の協力を得ながら収集を継続することができました。本展では、当館が形成したコレクションの一端を紹介します。

会期：令和8年（2026年）1月31日（土）～4月5日（日）

会期中の休館日：3月2・9・16・23・30日（月）

会場：北海道立北方民族博物館・特別展示室

観覧料：無料



木製 飼いトナカイ彫刻
ウイルタ 北川ゴルゴ作

企画展関連事業：

企画展関連講座「北方民族博物館の収蔵資料」

日時：2026年1月31日（土）10:00～11:30

講師：笛倉いる美（当館学芸主幹）

ロビー展 オホーツクシリーズ19「北の状景から」

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の第19回目として、地域の魅力を伝える写真作品を紹介します。

会期：2026年1月4日（日）～1月18日（日）

会場：北海道立北方民族博物館・ロビー

観覧料：無料

講習会「はじめての歩くスキーツアー」

日時：2026年1月10日（土）9:30～11:30

講師：中田 篤（当館主任学芸員）・網走スキー協会会員ほか

保険料：100円 対象：小学生以上（小学生は保護者同伴）

持ち物：手袋、帽子、体温調整できる暖かい服、サングラス

ホリデーイベント「動物の毛皮に触ってみよう

—アイヌ民族と北方民族の毛皮利用を知る・触る—

国立アイヌ民族博物館との共催で、アイヌを含む北方民族の毛皮利用について学ぶイベントを開催します。当日は様々な動物の毛皮に実際に触れることができます。

日時：2026年2月22日（日）・23日（月・祝）

会場：国立アイヌ民族博物館（白老町）

参加料：無料（ただし、別途ウポポイの入場料が必要）

INFORMATION

行事報告

イベントなど

◆11月3日（月）、文化の日に合わせて、「第14回はくぶつかんまつり」が開催されました。恒例となっている無料提供のボルシチやポップコーンのほか、くじら串やくじら汁、ホットココアなどの売店が並びました。また、日本で最も歴史のある（？）当館主催の第19回モルック大会では、見事「フカオさん」チームが優勝を果たしました。風の冷たい一日でしたが、秋晴れに恵まれました。

参加報告

◆9月28日（日）、網走アイヌ協会が主催する「カムイチエップ祭り」が行われました。これは、川を遡上してくるkamuy-cep（神-魚）を迎えるアイヌの大切な儀礼です。当日は川でサケを特別採捕したのち、お祈りを捧げ、参加者みんなで汁にしていただきました。当館からは鈴木将謙主任と佐藤重吾学芸員が参加しました。



川に上ってきたサケたち

◆10月24日（金）～26日（日）、阿寒湖温泉にて、「第10回国際口琴大会」が開催されました。25ほどの国から多くの口琴奏者や研究者が集まり、ライブやワークショップが開かれました。当館からは学芸員4名と佐々木智英博物館課長が参加しました。



フィナーレの様子

はくぶつかんクラブ

◆8月30日（土）、はくぶつかんクラブ「白樺の皮のノートカバー」（講師：平栗美紅解説員）を開催しました。

◆9月13日（土）、はくぶつかんクラブ「ミトン型のヨーヨーづくりと遊び体験」（講師：石原生久代解説員）を開催しました。



すてきなヨーヨーができました

◆10月18日（土）、はくぶつかんクラブ「まが玉づくり」（講師：小西智恵解説員）を開催しました。



うまくできました。イエーイ！

◆11月8日（土）、はくぶつかんクラブ「皮でつくるマルチケース」（講師：菅原章子解説員）を開催しました。

北方民族博物館だより

No.139

令和7年（2025年）12月23日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<https://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会